

とうろう え ごれきだい ごえいほうけん 灯籠会御歴代御影奉懸

● 灯籠会ってなに？

亀山本徳寺では、毎年お盆の8月13日～15日の3日間、お堂を切り灯籠で美しく飾り、歴代のご住職の御影（ごえい／肖像画）を本堂両脇の「余間（よま）」に掛けて御安置します。この行事を「灯籠会」と呼びます。

歴代のご住職たちが、どれほど苦勞して仏の教えを受け継いできたかを偲び、その功績（仏徳）をたたえるための行事です。

● いつから始まったの？

はつきりした起源は分かっていませんが、江戸時代ごろまでさかのぼると考えられています。もともとは本山・本願寺で古くから行われてきた行事で、寺の外には公開せず、寺の中だけで行うのが習わしでした。

この行事の目的は、お念仏の教えを受け継いできた歴代の指導者（善知識）の苦勞と恩に報いるため、今の門主（もんしゅ／本願寺のトップ）が、歴代指導者の遺影を安置し、その功績をたたえることにあります。

※お盆やお正月にご先祖の霊をお迎えする、一般的な祖先供養の風習とは意味合いが異なります。

● もともとは身内の行事だった

当初は、本願寺の門主一族を中心とした、いわば「身内の行事」だったと考えられます。しかし時代が進み、本願寺の組織が整っていく中で、次第に公的な行事としての性格を帯びるようになりました。とはいえ、あくまで本願寺の行事です。

一方、本徳寺は昔から本願寺の一門（同じ系統の寺）として播州（今の兵庫県南西部）で活動してきたため、本願寺と同じような行事を受け継いできました。その一つが、こ

の「灯籠会」での歴代御影の奉懸なのです。

● 歴代御影の仕方と配置

本願寺と本徳寺、1年ごとに交代で御影を掛ける。本堂の中を外陣（げじん／参拝者側）から見渡すと、次のように並びます。

中央の内陣（ないじん）左右脇壇に親鸞聖人と中世本願寺御歴代10名（一般の寺では蓮如上人）、その両脇の余間に本願寺御歴代、年により本願寺の分家にあたるは本徳寺歴代の御影です。

● 本願寺と本徳寺は血の繋がりも深い

歴史的に見ると、本徳寺の歴代住職は本願寺と血縁関係が深く、次のように行き来がありました。本願寺から本徳寺へ7人が入寺。本徳寺から本願寺へ2人（法如上人・静如上人）が入寺。

このように、血のつながり（血脈）と教えのつながり（法脈）が互いに関わり合いながら、仏の教えの灯（法燈）を守り続けてきたことが、本願寺の歴史そのものを物語っています。

● 本徳寺の歴代住職

実玄・実円・実勝・証専・顕妙・准専・准圓・寂圓・寂宗・住最・法静・法依・本聞・広浄・広要・昭道・昭世

● おわりに

灯籠会の期間中に安置される御影を拝見しながら、当時のお念仏相続の歴史に思いを馳せていただければ幸いです。外陣からこれらを拝すると、本徳寺の歴史的な特色が今によみがえってきます。

より詳しく知りたい方は、掲示板に掲示している「本願寺／本徳寺歴代系譜」（本願寺と本徳寺の詳しい血縁関係をまとめた資料）をご覧ください。

